それでいい・・・

熱男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
それでいい・・・

【Ｎコード】
Ｎ２３５６Ｃ

【作者名】
熱男

【あらすじ】
主人公の健二はまだ社会人としても人間としても未熟な２２歳。そんな健二の職場のさまざまな価値観や人間模様を描いた作品。

第1話　不満

「おい！早くしろよ！！」上司の宮根がいった。
「はい！すいません！」健二は答えた。
うるさい機械の騒音の中、工場は忙しなく稼動している。
「・・・なんで俺だけ・・・」健二は小さく不満を漏らした。
宮根は４８才で仕事は出来るが、どこか不器用さがありどちらかというと「職人気質」である。
健二は宮根に対して仕事で尊敬できる部分がありつつも人間的にどこか認めたくない気持ちであった。
宮根は仕事に対しても真っ直ぐで、生き方も真っ直ぐに生きる男である。
嘘が嫌いで正義は勝つと信じて、白黒をつける様な男だ。
それが、時に角が立つ事もあるのだ。
健二は宮根の「宮根個人」の正解論を押し付けるような発言・態度はどうしても納得できない気持ちであった。

「最近仕事が面白くない・・・」
健二は同僚の聡史に愚痴をこぼした。
「なんでよ？こんな楽なところは無いよ！！言われた事をこなしてればいいし、残業はあるけどその分給料は増えるし。
毎日同じ事して休みになればパ～っと遊べるし最高だよ！！」
聡史は笑顔でそう答えた。
「お前は気楽で良いよな・・・」
「気楽っていうか、なんにも考えてないの！！あっはは！！」
聡史はそういって声高々に笑い、休憩室にうるさいぐらい響いた。
「そういう性格になりたいよ」
健二は微笑みながらそういった。
聡史は２２歳で明るくポジティブに生きる男だ。

健二は自分に無い面をもってる聡史に惹かれて、友達として同僚として付き合ってる良きライバルの様な存在である。
健二は聡史同様２２歳だ。仕事はそつなくこなすが、どこか虚しさを抱え生きてる男だ。

「俺はこれで良いんだろうか？」
「もっといい事ないかな？」
「俺はこんなレベルじゃないんだ！」

そんな事を思い日々を過ごしていた。
まさに聡史とは「正反対」である。
「って！何が不満なんだ？」
聡史は相談に乗ってやるという感じで健二に質問してきた。
「あ～・・・いや・・・なんか・・最近宮根さんからの風辺りが悪いんだよ・・・」
「どんな感じで？」
「さっきだっていつもの様に仕事をしてたんだけど、早くしろって怒鳴る様に言うんだぜ・・・
別に怒鳴られる程遅くも無かったし、仮に遅くても言い方ってあるだろ？
最近そんな事が続いてて正直ムカつくんだよ。」
「言い方がムカつくのは良く分かるよ。俺も宮根さんに何もそんな言い方しなくてもって思った事もあったよ。
だけどさ、宮根さんは仕事も出来るしそれなりにこの会社では認められて地位もあるし
宮根さんが正しいのかなって思ったら別に怒鳴られても腹立たなくなったな。
それにやっぱり自分を客観的に見たら自分に甘く見てる部分ってあるだろ？
そういった時、叱ってくれてるのかな～なんて思う訳よ！」

「まさか聡史からそんな言葉が出てくるとは思わなかったよ！」
健二は冗談っぽく聡史を冷やかした。
「バ～カ！俺だって考えるときは考えるの！！健二みたいに引きずらないだけだよ！！」
聡史は微笑みながら的を得た一言を放った。
「そうか・・・だけど確かにそうだよな・・・」
健二は聡史の意見に共感し考えてると
「キ～ンコ～ン・・・」昼休み終了のチャイムが鳴った。
「さ～て・・・午後からも頑張るか～！・・・あんまり考えるなよ！！」
聡史はそういうと意気揚々と作業場にもどって行った。
「おう！ありがとう！！」
健二は笑顔で返事をして手に持った缶コーヒーを飲み干し作業場へと急いだ。

現場に戻った健二は機械のスイッチを入れ作業開始の準備をした。
「集中！集中！！」
聡史に言われたように自分に厳しく仕事をしてみようと仕事に取り掛かった。
特に問題なく作業は1時間を過ぎた。
「なんかいつもより捗ってるし、仕事が終わったら充実感があるだろうな。」
そんな事を思いながら順調に作業をしてると
「バカ野郎！！何してんだ！！」
怒声が聞こえてきた。
声の主は宮根である。
珍しく先輩の木下がヘマをしたらしい。
木下は健二より2年先輩だ。歳は２８歳。仕事も出来て面倒見が良くそろそろ昇進かと期待されてる若手である。
「そういうやり方をしたら下のもんが真似をするだろうが。

お前がそういう事をするから最近の新人は変なやり方をするんだ！！」
どうやら仕事の仕方で揉めてるらしい。
「お言葉ですが、やり方は確かに宮根さんに教えてもらったやり方ではないですが、俺なりに考えてやったやり方なんです！！変なやり方ってのはやめてください！」
「口答えをするな！！変なやり方を変って言ってなにが悪い！！」
「けど、答えは・・・」
「うるさい！！そんなやり方は駄目だ！俺の教えたやり方でやれ！」
「・・・分かりました・・・」
木下は不満を噛み締め返事をした。

健二はそれを見ていてどうにも納得できない気持ちが溢れてきた。
「なんであんな言い方なんだ。もう少し木下さんの事も考えて言ってやれよ。」
健二は心の中でそう思いながら作業を続けた。

「キ～ンコ～ン・・・」
時計を見ると5時半になっていた。本日は残業も無いらしくこれで終了である。
タイムカードを機械に挿入。
「ビ～・・・ガチャン」
「ふ～今日も終わった～」
健二は更衣室へと向かった。

「お疲れ様で～す！」
健二より早くタイムカードを押した奴が足早に帰っていく。
健二は私服に着替えてると
「お疲れさん！」
木下だった。

「お疲れ様です。今日はなんか大変でしたね・・・」
「あっ・・・見てた！！」
木下は照れくさそうに笑いながら言った。
「参ったよ・・・宮根さんは頑固一徹だからな～・・・」
「あんな言い方は無いと思いますけどね。」
「あはは・・・やっぱり健二もそう思うか？」
「ええ・・・まぁ～・・・」
「宮根さんは自分のやり方じゃないと気がすまないんだよ。」
「だけど、もう少し木下さんの事も考えてあげても良いんじゃないかとは思いますけどね」
「かぁ～・・・良い奴だなぁ～お前は！！」
満面の笑みを浮かべた木下は嬉しそうに健二に言った。
「健二、今日時間ある？」
「えっ！？まあ暇ですよ」
「だったら飲みにいこう！」
そういえば入社してまだ木下と個人的に飲みに行った事は無かった。
「喜んでお供します！！」
「おう！」
兄貴と子分の様な掛け合いで、二人は笑いながら着替えを済ませ会社を後にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2356c/

それでいい・・・

2010年10月14日13時59分発行